

郷鉄工所（破産）大口債権者・朝倉応水（株式会社充雲）が、郷鉄工所に送り込んだ2人のブレン（西浜大二郎・小澤政太郎）と繰り広げた上場企業乗っ取り劇！②

朝倉応水が郷鉄工所に送り込んだ西浜大二郎と小澤政太郎

朝倉は、郷鉄工に多額の貸付を行っていた。朝倉を郷鉄工に引き入れたのは、有名事件師の松尾隆である。当時の郷鉄工所は、東証2部上場廃止寸前の末期状態にあったが、朝倉に限らず、郷鉄工には他にも多くの債権者達がいた。どの債権者も自分の債権だけは保全したいと考えていたことだろう。

そんな中、朝倉は自分の債権を保全することに成功した。別に、コンプライアンスや上場企業としてのモラル上、何ら落ち度がないというのであれば、問題ない。

しかし、朝倉のやったことは、末期の上場企業・郷鉄工が失っていたガバナンス機能の隙をつく方法を取り、自分だけ逃げ切りを図ったことが問題である。そして、これに加担した人物が、前回お伝えした、朝倉の息のかかった2人の人物である。1人は、西浜大二郎という人物である。西浜は、アウン・キャピタル・マネジメント株式会社の代表取締役で、郷鉄工社内ではコンサルタントを自称していたようだ。

もう1人は、小澤政太郎という人物である。小澤は、公認会計士でアーリーステージの企業のIPOなどをやってきたそうだ。また、「株式会社スプレッド 代表取締役」、「ハジメタロウ株式会社 超チーフプロデューサー」という肩書きもある。小澤は、朝倉との関係はそれほど深くないが、西浜に連れられて、朝倉による郷鉄工の乗っ取り、遠隔操作に加担した人物である。

ガバナンス機能を失った郷鉄工所を乗っ取った朝倉応水たち！

朝倉は、上場企業のガバナンス機能を失った郷鉄工に、上記2人の人物を送り込んで経営の中枢を支配した。

朝倉は、西浜大二郎を郷鉄工の東京支社に常駐させ、郷鉄工社内の金の権限を掌握した。当時の郷鉄工は、資金繰りは、専ら東京支社で行っていた。そのため、西浜を東京支社に常駐

させることで、郷鉄工の金の流れや支払いを管理させるようにしたかったのだろう。そして、西浜は、小澤政太郎を使って、郷鉄工の経理専用のパソコンを小澤に嚴重に管理させたらしい。

これが、郷鉄工が大口債権者にすぎない朝倉に、事実上乗っ取られた瞬間である。こうやって、朝倉は、西浜と小澤を使い、郷鉄工を思いのままにすることになった。

荒れた郷鉄工社内、経理専用PCを取り上げ立てこもった小澤政太

郎

当然、郷鉄工には多くの社員がいる。上場企業であれば、当然、経営者のもと管理部門にも専門スタッフがいる。それにもかかわらず、朝倉らは、郷鉄工に入り込み、会社の経理専用PCを取り上げた。

上場企業としてのコンプライアンスの観点からは、とても考えられないような異常事態に、さすがに当時の郷鉄工社内でも大問題となり、朝倉らによる上場企業乗っ取り劇に、社内は怒号が飛び交い、荒れに荒れ、通常業務ができない異常事態に陥ったようだ。

当然であろう。

そんなことを認めたら、社員達も共犯になってしまう。

ところが、驚いたことに、朝倉は社員らの抵抗を抑え、経理専用PCを取り上げ、挙句、管理を任されていた小澤政太郎に至っては、PCを取り上げたまま社内で立てこもってしまったというから、驚くばかりである。

郷鉄工には業務上様々な支払い経費があるわけであるが、小澤は、その後の支払いにおいては、経営陣ではなく、専ら西浜の指示を仰いで支払いを行ったようだ。つまり、一債権者にすぎない朝倉に送り返された、一コンサルタントにすぎない西浜大二郎が、郷鉄工の事実上の決裁権を持っていたということである。

朝倉はもちろん、西浜というのも、ずいぶん、上場企業のコンプライアンスを舐めたもんである。小澤にしても、公認会計士としての見識に大きな疑問を抱かざるを得ない。この3人のやったことを軽く考えてはいけない。こいつらのやったことは、様々な法令に抵触しうることであり、許されることではない。

郷鉄工経営陣に辞任届を書かせた朝倉応水

では、朝倉がなぜこのような強権発動を行うことができたのか？
信じられない話であるが、この頃、朝倉は郷鉄工役員たちの辞任届を預かっていたそうだ。
どういうことなのか？

朝倉は、郷鉄工に対し多額の金銭の面倒を見ていたことは確かである。そして、いち早く保全に走っていたことも事実である。さらに、朝倉は、この時期には、郷鉄工の林社長以下、複数の取締役たちから、辞任届を預かっていたようだ。この辞任届は、朝倉が経営者たちを呼び出し、書かせたものと言われている。

しかし、本来、辞任届というのは、会社に対して提出するものである。
なぜ、一債権者にすぎない朝倉が、上場企業・郷鉄工所役員たちの辞任届を預かったのか？
朝倉に辞任届を預かる資格など、どこにも存在しないはずである。これだけでも、重大な問題である。

今からでも、捜査機関は、当時のコンプライアンスの状況について、関係者から事情を聞くべきである。社長の林に至っては、朝倉には何も言えず、とても上場企業の最高経営責任者として責任ある職務が果たせなかったというから、株主や利害関係者たちはうかばれない。そんな中での朝倉一人勝ちである。刑事事件に十分値する事案であろう。

このように、朝倉は、郷鉄工の経営陣の首根っこをつかまえ、自分の意のままに上場企業の経理機能という中枢をもぎ取ること成功したのである。

上場企業でやりたい放題！朝倉応水と仲間たち

朝倉たちは、郷鉄工の経理機能を牛耳った。そして、こいつらは、これをいいことに、郷鉄工の支払業務では、朝倉の債権回収を最優先に行っていたそうだ。当然といえば当然であろう。これが目的だったのだから（笑）

例えば、こういうことがあった。
慢性的な資金不足に陥っていた郷鉄工は、すでに連日、方々から借り入れを行っていた。そんな中、郷鉄工の給料日にどうしても資金が足りないことがあった。この時、ある債権者が給料のためならやむをえないと、給料分を貸してくれた。しかし、たまたま資金が足りて、この給料分を貸してくれた債権者の資金は必要なくなり、一旦返済するはずであった。

しかし、なんと朝倉は、自分が郷鉄工から破格の価格で買い上げ、郷鉄工に賃貸していた本社・工場不動産の賃料（約 1,000 万円）を、その資金からまんま、西浜&小澤コンビを使って自分の会社に振り込ませてしまったのである。

この債権者が怒りに怒り狂ったという話があるが、当然である。朝倉一味の汚れた一面を物語るエピソードだ。この時、社内は朝倉一味の暴挙に対し大荒れし、小澤はバリケードを張って立てこもったようだ。とても、上場企業とは思えない狂気である。

思ったより長くなったので、続きは次回に！

今回は、上場企業・郷鉄工を乗っ取った、コンサルタントというか事件師にしか見えない、西浜大二郎が絡む上場企業をテーマにまとめます。それから、大阪厚生信用金庫が朝倉の会社「充雲（あうん）」に貸し付けた融資は妥当だったのか？ということについて、検証してみたいと思います。